

ExoKyotoセミナー 「ハビタブル惑星への旅」



寺田昌弘

大阪大学大学院生命機能研究科修了。専門は、宇宙医学、宇宙生物学。

2009年にJAXA宇宙医学生物学研究室(向井千秋研究室)に入社し、宇宙飛行士の健康管理技術の研究に従事。

2014年10月から3年間、NASA Ames Research Centerへ研究留学し、宇宙滞在中の健康評価手法の開発に向けた研究に従事。その後、東京慈恵会医科大学に移り、2018年4月より現職。



磯部洋明

京都大学大学院理学研究科物理学宇宙物理学専攻修了。

専門は太陽物理学。2008年に発足した宇宙総合学研究ユニットの

専任教員として、宇宙人類学や宇宙倫理学などの人文社会系との共同研究にも携わる。

2015年度から京都大学大学院総合生存学館准教授、2018年度より現職。



山敷庸亮

京都大学大学院工学研究科環境地球工学専攻修了。

専門は水資源工学、地球惑星科学だが、河川と海の陸域海洋相互作用の研究から水惑星の特殊性に興味をもち、太陽系外惑星データベースExoKyotoのプログラム開発を行う。これらを通じて天文学者・宇宙開発関係者らとの連携を深める。2014年度より現職。

日時 2018年7月8日 10:00-12:00

共催 京都大学宇宙総合学研究ユニット 宇宙生物学会

京都大学大学院総合生存学館 宇宙・地球環境災害研究会

場所 京都大学東一条館(京大正門から西へ徒歩5分)大講義室

プログラム(各講演30分+ディスカッション)

山敷庸亮(総合生存学館教授・宇宙総合学研究ユニット副ユニット長)

[ハビタブル惑星に人類は到達できるのか?]

寺田昌弘(宇宙総合学研究ユニット特定准教授(有人宇宙学部門))

[宇宙医学の現状と将来に向けて]

磯部洋明(総合生存学館特任准教授・京都市立芸術大学准教授)

[ハビタブル惑星への旅は人類に何をもたらすか?]

太陽系外惑星の中で、ハビタブル惑星、とされているいくつかの惑星があります。その中で地球にもっとも近い「プロキシマ・ケンタウリb」そして、40光年ほどの位置にある「トランプスト惑星系」。また地球に似ていると言われる「Kepler-186 f」「Kepler-62 f」そして「Kepler-452 b」などです。また、比較的静かな中心星の周りをまわると言われる「Ross-128 b」、22光年複数のハビタブル惑星候補がある「グリーゼ667 C惑星系」などなど。さて、これらの惑星への「旅」は果たして実現するのでしょうか？実現するとしたら、どのような「技術」でどれくらいかかるのでしょうか？プロキシマ・ケンタウリへ探査機を送り込む計画や、火星移住計画なども紹介しながら、地球惑星科学や天文学、そして宇宙医学的見地からこれらの惑星への「旅」の実現可能性について考えて見たいと思います。

* 2018年大学院総合生存学館オープンキャンパスの関連イベントとして開催いたします